

審査の結果の要旨

氏名 岩瀬令以子

塾は現代日本社会の多くの青少年にとって、集団的な社会化の場としての重要性が高まっている。にもかかわらず、塾の量的な実態調査や顕在的カリキュラムの社会学的研究は一部では進められてきたものの、塾内部の隠れたカリキュラムやそのもとでの社会化パターンの考察は、ブラックボックス化したままであった。本研究は、近代社会における組織の編成原理の一つとしての目的合理性を軸にして、このブラックボックスに光を当てている。塾の中でも、人格形成期の小学生を対象とし、「中学合格」という目的合理性を強く持つことを求められる中学受験塾に焦点を当て、大手進学塾と個人経営の総合塾の二種類の塾のエスノグラフィーを通して、隠れたカリキュラムとそのもとでの社会化体験の構造化を、塾の現実に即して浮かび上がらせている。

第一章では、大手進学塾での授業のエスノグラフィーを通して、塾の目的合理性が単に教科知識の提供に留まらず、問題類型に応じた戦略的行為や教科・単元によって分けられた思考形態等の多面的な思考・行動パターンの構造化にもあらわれることが示されている。第二章では、効率的に正解を導き出すという受験で求められる行為を、塾生がどのように再定義し、いかにして教師・児童、児童・児童の相互行為のパターンが築かれているのかが示されている。第三章では、塾の外に焦点を当て、外部社会のまなざしを受けて、塾生がいかに塾と外部社会との間で「中学受験生」としてのアイデンティティを築き、行為者として塾における社会化パターンの構築に関与しているかが描かれている。第四章では、第二の事例である総合塾における中学受験クラスの考察を通して、視点を多角化させている。本事例が、進学目的の塾クラスとして大手進学塾と共通した特徴を示しながらも、進学塾に対抗的な価値に存在意義を求めめる中で、「学校的な指導」（例 ノートを取ることを強調する、発声練習）を学校以上に徹底している現実が示されている。

第五章は、総合塾が進学塾に対抗的な特徴を持ちながらも、受験期間際になると、より目的合理的な志向性を求められるために、通常の塾講師と児童との間の相互行為パターンが変容を余儀なくされる過程を分析している。第六章は、総合塾生と外部社会との関係が、社会化体験の構造化との関連で分析されている。最終章では、前記のタイプの異なる塾の二事例を通して、知識獲得という顕在的な側面に沿って一面的に語られがちであった塾を、隠れたカリキュラムに射程を広げて考察することによってより統合的な社会化システムとして描けることが問題提起されている。

本論文は、既存の塾研究では見逃されてきた、塾の対人レベルにまで降りた社会化過程の多面的な構造化の仕組みを現実の記述を通して浮かび上がらせ、ブラックボックス化した塾内部における隠れたカリキュラムに光を当てることに成功し、既存の塾研究と隠れたカリキュラム研究の双方に問題提起をする内容となっている。また、目的合理的志向が強い象徴的な場としての中学受験塾における隠れたカリキュラムとそのもとでの社会化システムの多面性を、エスノグラフィーによって実践場面に即して浮き彫りにし、考察することによって、組織の目的合理性をめぐるマクロな社会学理論に対して、文脈に即した視点の必要性を提起している。以上の点から、本論文は、博士（教育学）の学位論文として十分な水準に達しているものと認められる。